



家族の食卓

昨日の続きと設問を紹介しよう。

*

電車内という社会空間が携帯電話の数だけの自己領域によって分割されるという光景と似た状景が家族の内側においても現出している。

暮らしの場面に例をとろう。食卓においてさえ今や家族の一人ひとりが携帯電話を手放さなくなっている。家族がそろって夕飯の食卓を囲む際にも電源を切らず、着信があれば、その人はごく当たり前のように食事を中断して応答するという挙に出るのである。こうした事象に対し、だから、どうなんだ、という反応はあるだろう。たしかに、今ではどこにでもある、取り立てて珍しがるほどの状景ではない。

しかし、私はひっかかりを感じる。このような状景に、食卓という最も家族的な場に自己領域が持ち込まれたという見方ができるからである。このような視点に立つと、直感的に複数の自己領域が持ち込まれたことによる、その持ち込まれた数に等しいだけの対幻想空間の分割が起こったというイメージが脳裡に去来する。分割は対幻想の解体へと進み、その結果、家族のアノミー化の過程をたどるのだ、と想像せざるをえなくなる。アノミー状態がすでに進行しているから、なんの抵抗もなく電源を切らないままの携帯電話、すなわち自己領域性を食卓に持ち込めるのだという解釈も同時に可能である。

あらためて家族にとっての食卓はどのような場であるのだろうかという疑問にとらえられる。これまで述べてきたことにしたがってやや形式ばった答え方をするとすれば、こうなる。家族にとっての食卓は、対幻想を基底にしつらえられた特別な場であり、特別な時間である。したがって主婦が食卓に並べた食べ物は、たん

に個体の生命機能を維持するための栄養物という意味の食べ物ではない。対幻想という世界における命の存続をはかるための特別な食べ物であり、それを家族と一緒に食べるということは、対幻想を食べるということなのである。対幻想を食べるということは、対幻想を更新し、存続しようとする意志の表明であるはずである。食卓につくということは、そうした家族の意志に個々が従うことでなければならない。

だが、携帯電話の着信があると、その所持者は食事を中断して、着信内容を確認することを優先するのである。着信の瞬間、自己本位主義的志向が自動的に作動し、次の行動において自己領域が露出する。そのようにして食卓空間はひび割れ、ひび割れた対幻想空間の裂け目からアノミー状態が顔を出す。

右のように想像し、把握できる食卓の状景は、電車の中で生じている自己領域による社会空間の分割という事態と構造を等しくしている、というのが私の理解である。

かくして対幻想は衰弱する。家族は同居しつつ、その実質は自己領域化していて、自己領域化した分だけ、バラバラであるという事態を招来していることになるだろう。家族は一緒にいるのに、その意味で一緒にいないのだ。家族の絆は綻び、ほどけてしまい、食卓は単なる同居人の集合する食事の場へと転じる。家族と家族の外との境界は消失し、消失した地点からアノミーが噴き出してくる。個々の内面に家族の中の孤独、すなわちよるべなさが広がっていく。

<設問> 傍線部の主張に対して、賛成か反対か、あな自身の意見を明確にし、その理由を具体的に述べなさい。